

近ごろ山僧善導という者有り。寰宇に周遊して、道津に求訪す。行きて西河に至りて道綽師に遇う。唯念仏弥陀の浄業を行ず。

既に京師に入り、広く此の化を行ず。弥陀経を写すこと数万卷、士女奉う者其の数無量なり。

時に光明寺に在りて法を説く。人有りて導に告げて曰く。今仏名を念ぜば定んで浄土に生まるるや不や。導の曰く。定んで生まれなると定んで生ず。

其の人礼拝し訖りて、口に南無阿弥陀仏と誦し、声々相い次いで光明寺の門を出でて、柳の樹の表に上りて、合掌して西に望みて倒まに身を投ぐ。下りて地に至りて遂に死しぬ。事台省に聞こゆ。

(道宣 『続高僧伝』)

(註)

道宣 五九六～六六七

善導 六一三～六八一